



特集 資料室の新たな取り組み

今年度より人と防災未来センター資料室は、展示に関して、当センターの内外で新しい取り組みをはじめています。センター内の展示では、常設展スペースに新たに設置された「震災資料のメッセージ-1.17の衝撃-」、そして「阪神・淡路大震災の風景-被災から復興までの写真記録-」という2つの資料展示を開始しました。また、センターの外での取り組みとして、石巻市魚町の展示施設「石巻3.11あすのためのミュージアム」の設営協力を行いました。今号では、このような新たな取り組みを中心に、資料室の今をお伝えします。

「震災資料のメッセージ-1.17の衝撃-」を開催中!

資料室では2013年度より、当センターに寄贈されている資料のうち、これまで公開されてこなかったモノ資料を中心に、テーマに沿って西館3階の常設展のスペースに順次紹介しています。今年度は、「震災資料のメッセージ-1.17の衝撃-」というテーマで、阪神・淡路大震災での直接的な被害を象徴する実物資料を、資料にまつわるエピソードとともに、被害の種類別に展示しています。

前回(2013年5月~7月)は、YASUKO Y KARTOUZOU氏から寄贈いただいた、割れた壺を展示しました。寄贈者は、フランス人の夫との結婚祝いにもらい、当時すでに亡くなっていた夫との思い出がたくさん詰まったこの壺をととても大切にしていたのですが、震災によって割れてしまいました。震災のショックで彼女はしばらく何も手をつけられませんが、フランスの友人や家族が部屋の掃除などを手伝ってくれました。この壺も彼らの手で直され、ガムテープが貼られています。

彼女は震災を思い出すことには抵抗があり、その後長い間この壺を見ることはありませんでしたが、阪神・淡路大震災から15年という節目になって、やっと再び見る事ができました。そして、震災を伝える記録の一つとして残してほしいと、当センターに寄贈されました。阪神・淡路大震災の揺れの衝撃、そして復旧にあたった人々の姿を伝えるこの資料には、自身の震災体験を見つめ、受け入れてきた寄贈者の15年間の想いや葛藤も込められています。



7月まで
展示していた
資料



現在
展示中の
資料

たキーホルダーを展示します。

これまで収蔵庫に保存されていた資料を見る貴重な機会となります。この機会にぜひ、当センターに足を運んでいただければと思います。

現在(2013年8月~10月)は、阪神・淡路大震災直後に起きた火災によって溶けて塊になった硬貨を展示しています。この硬貨は、長田区で焼失した中華料理店から拾い出されたものです。阪神・淡路大震災では、水道が止まって消火活動ができなかったため、火が治まってからも、周囲が急激に冷えず、その結果として、硬貨が溶けて塊になりました。この硬貨を寄贈したのは当時、本家オランダ館の館長だった大貫計一氏です。硬貨は震災と火災の惨状を後世に伝える貴重な資料といえます。

次回(2013年11月~2014年1月)は、液状化の衝撃を伝える資料として、小学校のグラウンドから噴出した砂を展示します。2014年2月~4月、火災の衝撃を伝える資料の第二弾として、長田区の焼失した住宅から拾い集められた焼け焦げ



今後
展示予定の
資料



「阪神・淡路大震災の風景 “－被災から復興までの写真記録－”」を開催中!

資料室では、「震災資料のメッセージ」と同様に、寄贈された資料を多くの人に見てもらうために、2013年4月から当センター西館3階の常設展示スペースにて、「阪神・淡路大震災の風景“－被災から復興までの写真記録－”」の展示を行っています。当センターに所蔵されている写真資料から、阪神・淡路大震災の発生直後から復旧・復興過程でのまちの風景が見て取れる写真を、大型モニターで映すという新たな展示を始めました。ちなみに、このモニターに映し出している写真は、資料室で借りることができる場合もあります。

このように、資料室ではこれからも寄贈された資料の活用を積極的に進めていきます。



■ モニターで写真資料を映している様子

■ モニターに映し出している写真例



※ 兵庫県企画管理部知事室広報課寄贈写真

石巻 3.11
あすのための
ミュージアム

石巻市魚町の展示施設 「石巻3.11あすのためのミュージアム」の 設営協力を東北大学・中越メモリアル回廊・ 人と防災未来センターが共同して行いました

東日本大震災が発生してから約2年半が経とうとしています。復旧や復興へと歩みが進められるなかで、東北各地で災害の記憶を伝える試みが始まっています。そのような中で、人と防災未来センター研究部と資料室は、宮城県石巻市魚町にある鮮魚運送会社「宮城エクスプレス」の新社屋にて、東日本大震災の記憶を伝える展示「石巻3.11あすのためのミュージアム」の設営協力を、東北大学災害科学国際研究所と中越メモリアル回廊の3組織と共同で行いました。そして、同ミュージアムは、2013年7月1日に無事オープンを迎えることができました。この新社屋は、津波からの避難場所となる「津波避難ビル」でもあります。

設営に協力した3つの組織は、今年度「災害かたりつぎ研究塾」と題した、東北・中越・兵庫の災害の語り継ぎの形を参加者の皆さんと体感する1泊2日のツアーでも、協力関係を結んでいます。

地域や組織を越えて、被災地の展示を共に考えることは、これからの阪神・淡路大震災の記憶の語り継ぎを考えることに繋がると考えます。これからも、様々な形で被災地の記録に関する活動に協力していきます。

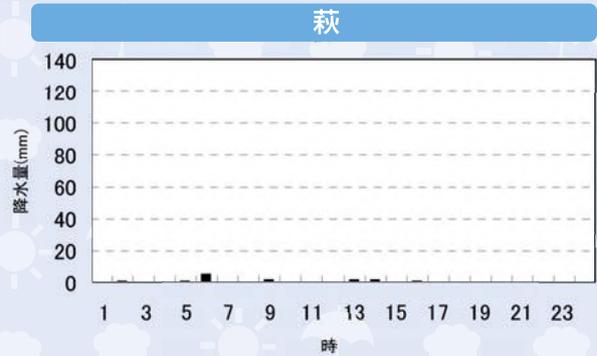
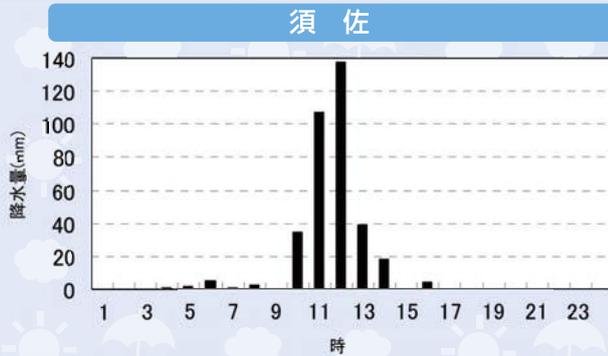


お天気コラム

—油断は禁物—

2013年7月28日(日)、島根県や山口県では集中豪雨により大きな被害が出ました。

下の図は、山口県の須佐と萩における、この日の1時間ごとの降水量です。(データは気象庁による)



7月28日、須佐では1時間に100mm以上、わずか3時間で7月の1ヶ月分の平常降水量よりも多い300mm以上の猛烈な雨が降りました。これに対し、萩の降水量は一日の合計で12.5mmと、この数字だけを見ると一般的な大雨注意報の発令基準にも満たない雨しか降りませんでした。その差は上の図から歴然です。

実は、この2つの観測所は同じ山口県萩市内にあり、約30kmしか離れていません。ごく狭い範囲で大雨が降ることは決して珍しいことではなく、ときには同じ市区町村内でも、大雨になるところと、雨がほとんど降らないところがあるのであります。同じように、津波、高潮、大雪、暴風などでも、ほんの数km～数十kmしか離れていないところで、高さ(強さ)がまったく異なることがあります。

警報・注意報はおおむね市区町村ごとに発令されます。ところが、上図右の萩のような場合、警報があたかも「空振り」したかのように見えます。過去に「自分のいる市に警報が出たのに雨があまり降らなかった」という経験はみなさんにもあると思います。しかし、警報発令の時点で、重大な災害が発生するおそれがあるのです。こうしたことから、警報・注意報が発令された場合、過去に「あまり降らなかった」からといって油断は禁物です。災害学習ノートにも、「警報・注意報などもこまめにチェックしましょう」と解説に書いています。もちろん、空が雲に覆われて暗くなった、冷たい風が急に吹いてきた、ラジオにノイズが入り始めたなどの変化には気をつけましょう。技術的な限界もあって、大雨などを正確な量、厳密な範囲で予測することは現在でもできません。警報や注意報が発令されてから動くのではなく、日ごろからの備えも怠ってはいけません。

この度、特別警報の運用が始まりました。特別警報が発令された場合は、ただちに命を守る行動をとることが必要になりますが(避難所に行くために外出することが必ずしもよいとは限りません)、**特別警報が発令されていないからといって油断しないでください!**この点はこれまでと同じなのです。

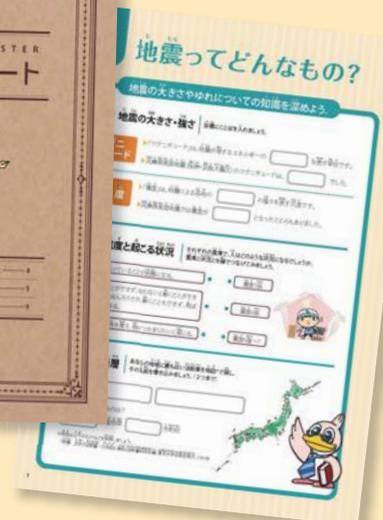
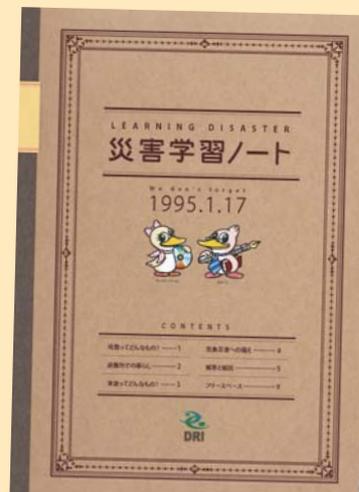
(担当 谷岡 能史)

「災害学習ノート」が完成しました

人と防災未来センターでは、来館された皆様に、阪神・淡路大震災のほか様々な災害について学んでいただくため、防災学習ワークシートをこれまでご活用いただけてきました。

この度、防災学習ワークシートをもとに、問題及び解答と解説をより分かりやすく記載した「災害学習ノート」を作成いたしました。当センターHPからPDF形式でもダウンロードすることができます。

皆様に広くご活用いただければ幸いです。



阪神・淡路大震災の被災歴史資料保全活動

— 歴史資料ネットワーク関係資料 —

自然災害によって被災した地域歴史資料の救出・保全に取り組んでいるボランティア団体「歴史資料ネットワーク」の関係資料が、センター資料室へ寄贈されました。

○歴史資料ネットワークの取り組み

阪神・淡路大震災の被災地では、地域や個人・団体の歴史的なあゆみを伝える歴史資料が、倒壊した建物の下敷きとなり傷ついたり、あるいはガレキとともに廃棄されるなどの事例が多かったです。これに対し、関西の歴史研究者たちが被災地の歴史資料を保全するために設立したボランティア団体が「歴史資料ネットワーク」(略称:史料ネット)です。史料ネットは神戸・阪神間の被災地で活動を続け、地域の歴史を伝える古文書や自治会の記録、ミニコミ紙などを保全し、その数は段ボール箱1500箱にのばりました。また、「古文書を読む会」や市民講座、あるいは展示会などを通じて、市民と研究者がともに地域の歴史を学びあう取り組みが続けられました。

その後、災害時の資料保全は全国的に広がり、同様の活動を行うボランティア組織が各地で設立されています。そして東日本大震災で被災した資料も、こうした全国に広がるネットワークによって保全が進められています。



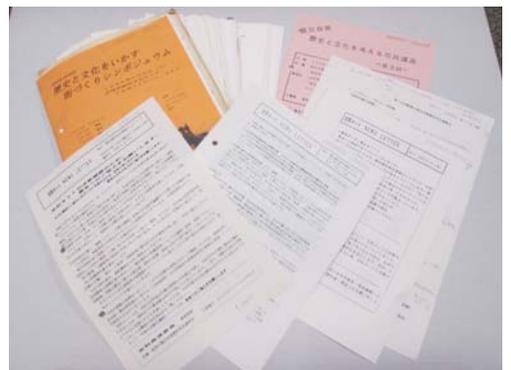
○初期の活動を示す資料群

寄贈された資料は、史料ネット初期の活動に積極的に参加していた寺田匡宏さんが所蔵していたものです。その内容は、史料ネットの会議資料や、歴史資料の被災状況調査のほか、阪神・淡路大震災に関する記録資料の収集・保存についての資料もあり、試行錯誤のなかで活動が進められたことがうかがえます。また、史料ネットが継続的に開催していた市民講座などの関係資料からは、災害時だけでなく、日常的に歴史資料の価値を地域のなかで共有していこうとする史料ネットの姿勢が読み取れます。

閲覧をご希望の方は、資料室スタッフまでお気軽にお問い合わせください。

歴史資料ネットワークのホームページはこちら

<http://siryo-net.jp>



資料室展示のお知らせ

資料室ミニ展示を開催中です!

5階の資料室のスペースでも、寄贈された資料のミニ展示を行っています。

2013年4月～6月までは「災害遺構のいま」を開催していました。この展示では、阪神・淡路大震災の災害遺構に関する一次資料や、他の地域で保存されている災害遺構の写真を展示しました。

現在は「失われた神戸の記憶展」を開催中しています。戦前からの神戸のまちの風景を描いている宇佐美重氏が自費出版により発刊された画集「KOBEの原風景」の原画が当センターに寄贈されています。その中から、震災によって消えてしまった神戸の建物や風景の絵画を展示しています。

資料室に来られた際には是非ご覧ください。



■ 現在開催中の「失われた神戸の記憶展」の様子

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30～17:30(展示施設とは時間が異なりますので、ご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます